

ヒバクシャ医療国際協力会通信

CONTENTS

- 震災支援 東京シンポジウム「長崎から福島へ」
- チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修
- 韓国医師等へ受入研修を実施
- 専門家派遣事業（韓国・カザフスタン）
- 出前講座
- 核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄附
- ホームページにPDF書籍を追加しました



▲ 東日本大震災復興支援 東京シンポジウム「長崎から福島へ」第1回目の会場全景

東日本大震災復興支援のため 東京で3回のシンポジウム開催

～長崎から福島へ～

NASHIMは、東日本大震災に伴い発生した福島原発事故により、放射線に対する大きな社会不安が生じていることから、放射線を正しく理解してもらい、風評被害をなくすため東京で連続3回のシンポジウムを開催しました。



開会に際し挨拶する
荻本ナシム会長



被災地にエールを送る田中副知事



被災地にエールを送る田上市長

第1回シンポジウム ～放射線の正しい理解のために～ 5月20日

会場 青山ダイヤモンドホール(東京都港区) 参加者数 約200人



長崎大学先導生命科学研究支援センター
松田 尚樹 教授 講演の様子



長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長
山下 俊一 教授 講演の様子

(山下教授は、平成23年7月から福島県立医科大学副学長に就任されました。)

第2回シンポジウム ～世界は放射線リスクとどう向き合うか～ 6月15日

会場 青山ダイヤモンドホール(東京都港区) 参加者数 約180人



日本総合研究所 理事長
寺島 実郎 氏 講演の様子



長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長
山下 俊一 教授 講演の様子

第3回シンポジウム ～次の世代のために～ 7月16日

会場 新霞ヶ関ビル 灘尾ホール(東京都千代田区) 参加者数 約100人



福島県立医科大学 救命救急センター医師
長谷川 有史 氏 講演の様子



参加者からの質問に答える福島県立医科大学
放射線科医師 宮崎 真 氏



長崎大学病院永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター
大津留 晶 准教授 講演の様子



シンポジウム出席者

(大津留准教授は、平成23年10月から福島県立医科大学 医学部教授に就任されました。)

※詳しくは、NASHIMホームページにシンポジウム記録集を掲載しています。
以下のURLからアクセスしてください。

URL http://www.nashim.org/jp/data/2011sympo_pdf/

受入研修事業

チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修を実施



蒔本ナシム会長を表敬訪問する研修生

チェルノブイリ原発の周辺諸国やカザフスタン共和国で放射線被ばく者の治療にあたる医療従事者に対して、指導や医療情報の提供を行うため、今年度も6名の医師等を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修者は7月20日から約1ヶ月間、長崎に滞在し、長崎大学を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学び、ヒバクシャ医療分野の関係者との交流を深めました。

また、研修期間中には長崎原爆資料館や追悼平和祈念館の見学、平和祈念式典への参列など、長崎原爆の実相に

ついて学び、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護ケアについて理解を深めました。

研修後の感想



Irina Chebotareva (イリーナ・チェボタリョーヴァ)

ロシア共和国 オブニンスク放射線医学研究所
放射性核種診断学 医師

2011年3月に福島原発で起こった悲劇的な出来事にもかかわらず、NASHIMのみなさんは放射線医学関連の様々な分野で働く専門家を招聘して研修を行ってくださり、日本の経験を学ぶために素晴らしい環境を整えてくださった。

長崎県知事、長崎市副市長に表敬訪問をする機会があり、とても感謝している。私たちの国々と交流を深めることに対し、このように高い地位の方々が関心をよせてくださっていることには、非常に責任感を感じさせられた。

長崎原爆資料館や長崎原爆死没者追悼平和祈念館を見学し、長崎の人々が経験した恐ろしい出来事について、拭いさることのできない印象を受けた。また、このような悲劇を繰り返さないために、記憶を残していく必要性を痛感させられた。

長崎市被爆者健康管理センターや、日本赤十字長崎原爆病院、国際ヒバクシャ医療センター、恵の丘原爆ホーム、長崎大学病院、放射線影響研究所などの見学により、原爆被爆者の医学的観察の手法や、医療支援の質、高齢の患者へのケアなどについて、とてもよく知ることができた。

長崎大学の片峰学長や、医学部長には、大学で研修を受けさせて頂き、特にお礼を申し上げたい。聴講した全ての講義は非常に詳しく、興味深く、わかりやすいものであった。また、私は専門研修を原研リスクで受けたので、研修中、常に支援していただいた山下教授およびスタッフのみなさんには特に感謝したい。実験室で行った研究は非常に学術的に意味の深いもので、ここで得た知識は今後の私の仕事を大きく助けてくれることだろう。

研修中に心に残ったのは勉強の部分だけではなかった。多くの寺社や歴史的な博物館、素晴らしいカフェ、美味しい食事、海、海水浴場、そして比べるものとしてない日本の温泉のある長崎の町自体が、私の心に永遠に残るだろう。



Olena Khukhrianska (エレナ・フフリヤンスカヤ)

ウクライナ共和国 ウクライナ医学アカデミー
放射線医学研究所 がん疫学研究室 研究員

非常に有益で実りのある研修に参加させてくれたNASHIMIに、とても感謝している。研修は内容が濃く、多岐に渡るものであった。被爆者医療に携わる医療機関など、多くの場所を訪れることができ、放射線医療の分野の多くの専門家と会い、講義を聞くことができた。

研修の初めに訪問した長崎原爆資料館からは、この悲しい出来事の、重さと苦しさが伝わってきた。しかし、それによってこの世に平和より大切なものはないこと、平和を守るためにはあらゆる努力をしなければならない、ということについて考えさせられた。

長崎県知事、長崎市副市長は私たちをととても暖かく迎えてくれた。私たちの研修に関心を寄せ、チェルノブイリの事故後の状況について質問をされた。

長崎大学学長の表敬訪問時には、日本の教育制度、特に未来の医師たちの養成について詳しく知ることができた。

放射線影響研究所では、寿命調査集団 (LSS) の登録や調査法について知った。ここの疫学的調査は、50年以上も続いている。また組織バンクで、どのように組織が保存されているのを見ることができた。放射線影響研究所の仕事は、原爆が被爆者の健康にどのような影響を与えているのかを調べる上で、計り知れない貢献を行っている。我がウクライナでは、研究に際し、しばしば放射線影響研究所に倣っている。

恵の丘原爆ホームでは、高齢の被爆者に対し、心配りと愛情を持って接していることに心を打たれた。そして原爆投下時に若い女性だった高齢の女性が、どれほどつらい経験だったか、しかし人々がどのように助け合ったかを自ら語られるのを聞いた。

大村の長崎医療センターでは、病院の設備や、様々な診療科、検査室を見学した。診断のための資材は豊富で、あらゆる病気の患者に対応できるようになっていた。また、病院にはドクターヘリがあり、離島の人々の医療に役立てられている。

原研医療では柴田教授のご指導のもと、最新の放射線疫学の研究に関する知識を増やすことができた。原研で得た知識を用いて、あらたな企画を立て、2つの疫学的研究の中間評価を行った。

将来の仕事に役立つ、多くの興味深く、有益な事柄を、今回の研修中に知ることができた。自分の知識レベルを深めてくれたNASHIMIに対し、私は深く感謝している。

そしてもちろん、長崎という町にも、そこに住む好意的な人々にも、とてもいい印象が残ったことを述べておく。



Victor Kondratovitch (ヴィクトル・コンドラトーヴィチ)

ベラルーシ共和国 ミンスクがんセンター
甲状腺がん 副院長

被爆者でない方との対照における原爆被爆者の疾病や癌による死亡率、またさまざまな癌治療に関する講義を聴講した。また福島の原因事故を例に、住民の放射線防護体制についても学んだ。

NASHIMIは、長崎市の副市長や、長崎県の知事への表敬訪問をアレンジしてくれた。

それに、長崎県医師会会長とも会うことができた。

長崎大学医学部では業務を見学し、学長ともお会いすることができた。

8月9日は、第66回長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列し、原爆資料館も訪れた。

原爆病院や放射線影響研究所、恵の丘原爆ホームを訪問し、被爆者に対する医療補助・社会的支援についても知ることができた。

長崎滞在中に、日本人全体に対する医療体制についても知ることができた。長崎県大村市にある長崎医療センターを訪れ、外来や病棟、診断部門の仕事について概念を得ることができた。また、救急や一般の診療科についても知ることができた。

様々な病院で、新しい医療機器や手術道具について知る機会を得、多くの術式の行われ方を見ることができた。長崎大学病院での研修中には、甲状腺の病変や乳腺、肝臓、すい臓、大腸の癌、また肝移植の手術を見学することができた。また多くの消化器官のビデオ補助下手術についても知見を得た。

総合的に見て、研修は非常に高い水準であった。ここで得た知識や技術は、ベラルーシの人々の癌の治療や社会的援助の改善に、必ず役立つことだろう。



Uladzimir Bartnouski (ウラジーミル・バルトノフスキー)

ベラルーシ共和国 ゴメリ国立医科大学
公衆衛生・環境・放射線医学教室主任

この研修で私は、放射線量測定、放射線生物学、放射線病の診断と治療、放射線防護、日本の保健制度、日本の歴史的・文化的遺産など、昨今注目を浴びている問題に関する14の講義を聞き、2つのセミナーに参加した。研修の重要だったのは、被爆者や住民に対する各種医療・社会保障の施設、また長崎原爆被爆者の後障害や世界的な放射線医学の研究に携わってきた研究機関の視察である。これらの視察により私は、日本の医療機関で使われている設備や高い技術について、詳しく知ることができた。

この研修で私は、放射線量測定、放射線生物学、放射線病の診断と治療、放射線防護、日本の保健制度、日本の歴史的・文化的遺産など、昨今注目を浴びている問題に関する14の講義を聞き、2つのセミナーに参加した。研修の重要だったのは、被爆者や住民に対する各種医療・社会保障の施設、また長崎原爆被爆者の後障害や世界的な放射線医学の研究に携わってきた研究機関の視察である。これらの視察により私は、日本の医療機関で使われている設備や高い技術について、詳しく知ることができた。

専門研修においては、高村教授のもと、長崎大学医学部における医療放射線分野の専門家養成のための学習指導要領や、被爆者に対する放射線の影響に関する長年の研究成果、甲状腺癌その他放射線による疾病の検診方法と早期診断について学んだ。研修で得た資料を用いて、ゴメリ医科大学の学生のための、マルチメディアのプレゼンテーション資料を2つ作成することができた。

私の所属教室の研究テーマに従い、尿ヨード指数を用いて、ヨード供給率による日本とベラルーシの小児甲状腺病理のレベルと構造の比較分析を行い、チェルノブイリ原発事故により最も被害を受けた地域のラドンモニタリングのための、居住地におけるラドンの平衡比放射能測定法を学んだ。

日本の雑誌、「Journal of Radiation Research」に載せるため、高村教授と共同で「ベラルーシにおけるラドンリスク評価の間接的方法」という論文を作成した。

長崎で学んだことと自ら観察したことを元に、「ゴメリ・プラウダ」という地元紙に、「フクシマの神話と真実」および「日本人の長寿の秘訣」という2つの記事を書いた。

NASHIMの代表者および全ての関係者に対し、放射線被曝者に対する医療支援に関する経験の共有という国際的なミッション、また緻密な研修に対し、心から深く感謝したい。私が得た経験や知識は、帰国後チェルノブイリの原発事故による後障害の克服のために、将来必ず研究・教育において生かされることであろう。



Elvira Naduyeva (エルヴィラ・ナドゥーエヴァ)

カザフスタン共和国 国立カザフ医科大学
国際協力開発部 主任

私が受けた研修内容は、放射線の影響の予防及び除去に関する知識を得るためのものであった。

研修で得られた知識と経験を元に、カザフスタンの保健制度のいくつかの改革、特に癌検診の分野に対して提案を行いたい。各都道府県では様々な年齢層の住民に対する検診が、被健診者の社会的立場に応じて制度化され(往々にして腫瘍の所在が特定されている)、様々な疾病の早期診断につながっている。全ての都道府県において検診が可能であり、内臓の代謝異常その他の予防に役立っている。

長崎市および長崎県の先進的な病院の活動により、診察のために外部医療機関から専門医を招聘したり、ローカルネットワークを通じて、主治医に治療状況や他の医療機関での追加検査に関する情報提供を行ったりすることが可能になっている。

長崎県医師会は、県や国の医療制度改革の過程に参加している。

日本の厚生労働省のプログラム「健康日本21」の基本コンセプトについて知識を得た。

被爆者対策、および被爆者健康手帳を持つ住民の健康管理、患の丘原爆ホームの運営、被爆者のケアとリハビリは、高い水準であった。

長崎大学病院の内部連絡体制を知ることができ、非常に参考になった。重篤な患者、また入院患者の急変の際、容体に猶予がない場合、院内のすべての医師が連絡を受け、駆け付ける義務を負っている。長崎大学病院の外来の様子を知ることができた。素晴らしい病院運営により、多くの患者を受け入れ、患者に応じたさまざまな分野の専門医を抱えている。各レベルの管理職がきちりと自分の職務を果たし、患者、特に被爆者の回復に注意を払っている。

これらすべてについて、帰国後周囲に話し、可能であればカザフスタンの保健医療制度に取り入れたいと思っている。



Alexey Parfenov (アレクセイ・パルフォーノフ)

カザフスタン共和国 セメイ診断センター
放射線科医師

研修期間中、私は原爆後障害医療研究施設、長崎大学医学部、長崎市被爆者健康管理センター、日本赤十字原爆病院、放射線影響研究所、恵の丘原爆ホーム、国際ヒバクシャ医療センター、長崎大学病院、長崎医療センターの活動について学んだ。

また、他のNASHIM研修生とともに、長崎原爆資料館、長崎原爆死没者追悼平和祈念館など様々な施設を訪問し、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列した。

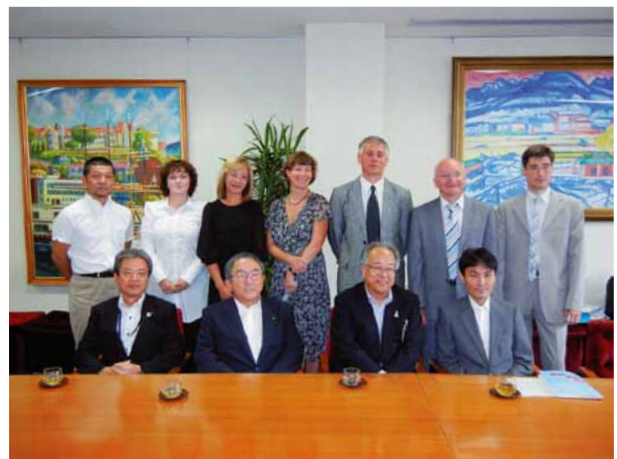
放射線医学、核医学、研究や治療の新たな手法などに関する講義を聴講した。

長崎大学病院の放射線科において専門研修を受けた。病院でデジタルレントゲン撮影装置、デジタルデンシトメトリー、CTスキャン、MRI、シンチグラフィー、PET/CTなど様々な機器を目にし、作業の基本について学んだ。放射線科のスタッフの指導のもと、さまざまな疾患の画像診断における鑑別診断の特徴について学んだ。

新しい経験と知識をえる機会を与えてくれた、NASHIMの方々、原研および大学病院のみなさんに対し、心からの感謝の意を表したい。



中村知事を表敬訪問



三藤副市長を表敬訪問



8月9日の平和祈念式典に参加



放射線影響研究所 講義後の所内見学

受入研修事業

韓国医師等へ被爆者医療研修を実施



長崎大学病院 宇佐先生の講義

韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる関係者を招いて受入研修を実施した。1回目は、医療職2名が12月18日から6日間、2回目は事務職2名が2月13日からは4日間、医療職2名が6日間、長崎に滞在し、日赤長崎原爆病院や長崎大学病院などの医療機関や長崎大学や放射線影響研究所などの研究機関等で、被爆者医療に関する最新知識の習得を行うとともに、原爆資料館などを訪れ被爆の実相についても学びました。

なお、2回目の研修では、長崎県が在外被爆者支援事業の一環で招へいたブラジル医師2名(ジュリオ・マツモト・トオヤマ氏とアリス・カヨコ・ミヤムラ氏)と一緒に研修を受講しました。

研修後の感想

1回目



鄭 泰垠 (チョン・テウン)

嶺南大学病院胸部外科 教授

放射線影響に関わる様々な組織の役割とシステムを見ることができました。研修生が二人だけにも関わらず、各組織及び構成員の誠実で意欲的な研修でいい勉強になりました。研修生の数が増えたら、より多様な観点から質問や議論ができると思います。



李 東建 (イ・ドンゴン)

釜山医療院 医師

被害の写真、被害地や患者さん、そして被爆者の証言は、今まで言葉でしか聞いていなかった原爆の残酷さと恐ろしさを実感させました。もう二度とこんなことが起きてはいけないと思わせてくれる本当の教育でした。

全般的な説明があったオリエンテーションと施設の見学を通じた動機づけの後に行われた先生方の講義は、今度患者さんの診療や相談の時、役に立つと思います。

2回目



黄 守鉉 (ファン・スヒョン)

慶尚大学病院神経外科 医師

研修の全般的なプログラムがとてもよかったです。ナシム受入研修のおかげで、原爆資料館、追悼記念館、平和公園を直接見て、また、現在恵の丘にいらっしゃる原爆被爆者の方々にお会いして平和は大切だと感じさせられました。

NASHIM研修を受けた人は皆平和を大切に思うようになれると思います。



張 仁一 (チャン・インイル)

陝川(ハプチョン)郡保健所 医師

全般的にととてもよかったです。関係機関の訪問、講義もとても役に立ちました。ナシム受入研修にお招きいただきありがとうございます。韓国での診療にとっても役立つと思っています。



李 東一 (イ・ドンイル)

陝川(ハプチョン)原爆被害者福祉会館 館長

被爆の実態と被爆者のための医療支援の現況について理解することができました。原子力発電など、平和的に利用されている核及び放射能の被害の可能性について一般国民にも正しく知らせる必要があると思いました。チェルノブイルの例を見て、放射能の被害を受けた地域には生命体が住めないということはとても悲しく、次世代に譲り渡すべき人類の財産、自然をきれいな状態で譲り渡す

ことができるよう努めることが大切だと思いました。

また、被爆2～3世の健康のために研究活動及び遺伝要因についての研究などをする必要があると思います。



権 寧日 (クォン・ヨンイル)

大韓赤十字社特殊福祉事業所 総務課長

今回ナシム受入研修は、全般的に有意義で原爆被爆者に対する理解を深めるのにととても役に立ちました。原爆記念館及び関連施設を見学しながら、今まで漠然としていた原爆の威力と破壊力について、より現実的で具体的に理解することのできるいい機会でした。

特に、放射線影響研究所と長崎原爆病院の訪問を通じて被爆者に対する理解と研究、そして治療及び管理について日本政府が力を注ぎ、良い成果を出していると感じました。

原爆被爆者の福祉支援事業に携わっている者として、韓国に帰って今回ナシム研修で見て、聞いて、感じたことを対象者の支援に生かす方法を講ずるよう努めます。



恵の丘原爆ホームで被爆体験を聞く研修生



長崎大学 中島教授の講義



長崎大学病院 河野病院長を表敬訪問



放射線影響研究所 赤星先生の講義



長崎大学 松田教授の講義



長崎大学病院 熊谷先生の講義

専門家派遣事業

韓国専門家派遣 ～被爆者医療セミナーの開催～

1回目は11月30日～12月2日に大邱(テグ)市内の郭病院と慶北大学病院で、2回目は2月2日～24日に慶尚大学病院(慶尚南道)とワレス記念浸礼病院(釜山(プサン)市内)で被爆者セミナーを開催しました。セミナーでは、最新の被爆者医療の研究成果や在外公館経由で手続きが可能となった原爆症認定申請書に医師が記載する内容について、各講師が説明をしました。セミナー参加者は熱心に説明を聞き、質問も寄せられました。

各回の講演者及びセミナーの内容は次のとおりです。

1 回 目

講演者：福島県立医科大学 医学部 大津留 晶 教授
「在外公館経由での原爆症認定申請書類の記載方法について」
講演者：長崎大学病院 永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター
宇佐 俊郎 副センター長
「長崎・広島原子爆弾の医学的影響」
会 場：郭病院・慶北大学病院(いずれも大邱(テグ)市内)

2 回 目

講演者：長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設 中島 正洋 教授
「原爆被爆者のがんリスクとゲノム不安定性」
講演者：長崎大学病院 永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター
宇佐 俊郎 副センター長
「在外公館経由での原爆症認定申請書類の記載方法について」
会 場：慶尚大学病院(慶尚南道)・ワレス記念浸礼病院(釜山(プサン)市内)



郭病院 郭院長と



慶北大学病院にて



慶尚大学病院で病院長表敬



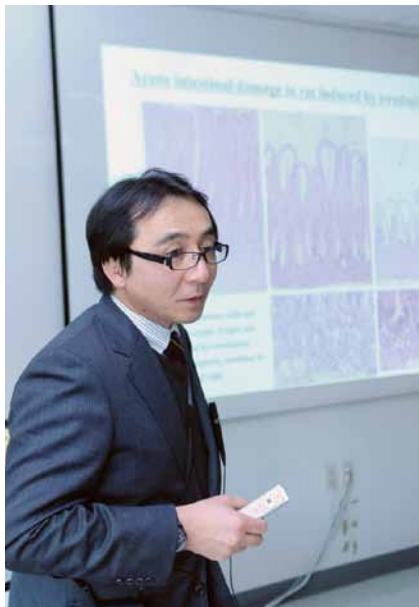
ワレス記念浸礼病院で病院長表敬



郭病院でセミナーを行う大津留教授



慶北大学病院でのセミナーの様子



慶尚大学病院でセミナーを行う中島教授



慶尚大学病院でのセミナーの様子



ワレス記念浸礼病院でのセミナーの様子



慶北大学病院玄関前にて

専門家派遣事業

カザフスタン専門家派遣を実施 8月25日～9月1日

セメイ医科大学の国際会議「The VII International Research and Practice Conference」

蔭本会長 開会時のあいさつ

このたびは、セメイ医科大学の「The VII International Research and Practice Conference」にお招き頂きくと共に、式典に臨席できたことを大変光栄に思います。NASHIMを代表してお礼申し上げます。

NASHIM (Nagasaki Association for Hibakusha's Medical care) は、世界各地で発生している放射線被ばく事故による被災者の救済を目的に1992年に設立された、国際協力のための団体です。

以来、被爆地長崎の行政と、長崎大学などの被爆者診療に携わってきた、あるいは放射線の影響を研究してきた医療機関や研究所と一体となって、世界の放射線被ばく者の健康被害に対して、長崎の原爆被爆者医療で培われた知識を役立てる目的で活動しています。

主な活動として、毎年夏の1ヶ月間、カザフスタンを始めとする旧ソ連諸国から医師を招聘して、長崎で原爆被爆者の医療・福祉や放射線関連の基礎医学を学んでいただいています。

これまでに、カザフスタン共和国からは25名をお招きし、その半数以上はセメイの方々です。

今年は、アルマティの国立カザフスタン医科大学とセミパラチンスク診断センターから研修生がおいでになりました。

特にここセメイで、NASHIMで学ばれた研修生がそれぞれの医療の場で、ご活躍されていることを、とても嬉しく思います。

ところで、我が日本では、今年3月11日に発生した、「東日本大震災」という未曾有の大規模な地震と、それによって発生した巨大津波がとても大きな被害をもたらしました。

この地震による被害に対して、カザフスタン共和国をはじめ、世界各地から暖かいご支援をいただいたことに、この場をお借りしてお礼申し上げます。

津波によって致命的な打撃を受けた、福島第1原子力発電所の放射線事故は、関係者の懸命な対応によって、ようやく沈静化しつつありますが、放射線の影響は、現在も続いており、まだ多数の方が避難をされています。

私もナシムは、長年培ってきた放射線に関する知識を生かしたシンポジウムを連続して開催し、放射線による風評被害を防ぐ活動をしているところです。

長崎大学においても、原発事故発生直後から現地に入り、長崎でのヒバクシャ医療やチェルノブイリでの原発事故での調査・研究の知見をもとに、緊急被ばく医療の立ち上げなどに努めました。

福島原発事故は、改めて放射線の脅威について考えさせられ、核兵器廃絶と世界の恒久平和について意を強くいたしました。

この会議を契機に、日本とカザフスタンの友好がさらに深まるとともに、核兵器廃絶に向けての取り組みが、一層進むことを祈念して、私からのご挨拶とさせていただきます。



挨拶を行う蔭本ナシム会長



セメイがんセンターで説明を受ける蒔本ナシム会長



セメイ診断センターで来訪者名簿に署名する蒔本ナシム会長



セメイ医科大学玄関前にて
左から、中島教授、高村教授、蒔本会長



セメイ医科大学 国際会議開始前記者会見の様子



優秀学生へ長崎大学からの長崎賞授賞式



中島教授の講演



高村教授の講演



前田先生の講演



国際会議主催のディナー会場にて



ナシム夏季研修生達とのディナー



核実験場跡爆心地で土壌サンプリングを行う高村教授



クルチャントフにて(核実験場跡への移動途中)



セメイ医科大マラット副学長ご自宅での昼食後



カザフ医科大学玄関前で民族衣装を着た学生代表者と



カザフ医科大学学長面談



アルマティ市内を見渡す高台から

出前講座

NASHIMでは、ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、「平成の鳴滝塾 ～ナガサキでしか受けられない放射線の授業～」と題して、長崎大学の先生方に小中学校へ出向いていただき講義を行う「出前講座」を平成19年度から実施しています。

今年度は、①7月8日 長崎市立福田中学校（2-3年生約190人）、②8月10日福島県いわき市内中学校生徒会リーダーと長崎市内中学校生徒会リーダー（81人）【長崎市が東日本大震災復興支援事業のひとつとして福島県いわき市内の中学校生徒会リーダーを長崎に招待し、長崎でしか体験できない平和学習や長崎市内中学生とのリーダー研修を実施。】に対し出前講座を行いました。

①福田中学校の出前講座は、「放射線事故の歴史～福島第一原発原子力災害より考える～」と題して、長崎大学病院永井隆記念国際ヒバクシャ医療センターの大津留晶准教授が行いました。



福田中学校で生徒の皆さんに講義する大津留晶准教授(福田中学校体育館にて)



東日本大震災での犠牲者の方々に
黙祷をささげる福田中学校の皆さん



出前講座を終えて参加した中学生と
握手する大津留晶准教授

※大津留先生は、平成23年10月から福島県立医科大学医学部教授に就任されました。

②福島県いわき市中学校生徒会と長崎市内中学校生徒会のリーダー研修での出前講座は、「放射線をサイエンスするー正しく知ろう放射線影響ー」と題して、長崎大学先端生命科学研究支援センターの松田尚樹教授が行いました。また、当日は、福島県立医科大学の山下俊一副学長が、「いわき市の中学生にエールを送る」との趣旨でご挨拶がありました。



講義をする松田教授



いわき市の中学生にエールを送る
山下副学長



出前講座に参加したいわき市と長崎市内
中学校生徒会の皆さん



熱心に出前講座に参加する生徒会の皆さん

核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄附



今年も核兵器禁止平和建設国民会議（核禁会議）に寄せられた浄財を活動助成金として、NASHIMに寄附をいただきました。核禁会議は1961年に結成され、核兵器廃絶、被爆者援護、平和建設のために積極的な活動を行っている団体ですが、活動の一環である被爆者援護運動として長年にわたりカンパ活動を実施され、多くの医療施設等へ健診車、車椅子、ベッド、医療機器等を寄附されています。NASHIMへも毎年、活動助成金を寄附していただいております。いただいた助成金は海外からのヒバクシャ医療研修生受入事業等に活用しています。

贈呈式は8月7日に長崎原爆資料館で執り行われ、NASHIMからは梶原事務局長が出席して、社会福祉法人恵の丘原爆ホーム等の10団体と共に贈呈を受けました。

核禁会議のこれまでの被爆者救援活動や核兵器廃絶の取り組みに深く敬意を表しますとともに、改めて厚く感謝申し上げます。

NASHIMとしましても、この活動助成金を有効に活用し、世界のヒバクシャ支援に努めてまいります。

ホームページにPDF書籍を追加しました

“ナシムが日本語版図書として出版していた『チェルノブイリ：虚偽と真実』と『放射能汚染の重大事故：影響と防護措置』をPDF書籍としてホームページにアップしています。

東日本大震災発生後、専門機関等から入手についての問い合わせが寄せられたため、多くの方々をご覧いただけるようホームページに掲載するものです。”



著者：L.A.イリーン

チェルノブイリ：虚偽と真実

著者：L. A. イリーン

翻訳：本村智子、浜田亜衣子、高村昇、本田純久、
芦澤潔人、山下俊一、本村政彦（翻訳順）
（平成9年度 日本語版出版図書）



編集：L.A.イリーン

放射能汚染の重大事故：影響と防護措置

編集：L. A. イリーン 外

翻訳：西条泰博
（平成14年度 日本語版出版図書）

PDF書庫へは、以下のURLからアクセスしてください。

URL：<http://www.nashim.org/jp/pdf/index.html>